

放デイから自立と就労へ ～テラコヤのスター・大山諒さん～

川崎市川崎区

株式会社 D&I 放課後等デイサービス テラコヤキッズ川崎教室

職員 沢田 友基

1 はじめに

これは、私たちテラコヤキッズ川崎教室の卒業生の大山諒さんが、高校を卒業後、就職支援センターを通して就職した会社に合わず、1年半で退職し、民間企業（株式会社 D&I）の就職支援を受けて、自分で働きたい会社を選択して就職するまでのお話です。

2 事例や取組の紹介

【当教室と運営会社について】

テラコヤキッズ川崎教室は 2014 年 3 月に川崎市川崎区に開所した放課後等デイサービスで、運営会社の株式会社 D&I は 2009 年創業の障がい者の就労支援と教育事業を行う民間企業です。

運営会社の株式会社 D&I は就労支援の会社ですが、テラコヤキッズでは就労に関する作業的な訓練よりも『生きる力』を身に付けることを重視しています。子どもたちの進路が就労でも施設でも、「どこに行っても自己選択できる人間になってほしい」という願いから、社会の中で生きる力が育つように、行動面や、社会性、集団の力、自己発信や自己解決の力を伸ばすことに力を入れています。

【大山諒さんの紹介】

大山さんは、2014 年 5 月から 2016 年 3 月まで川崎教室に在籍した「卒業生第 1 号」です。川崎市立の定時制高校に通っていた大山さんは、当時の担任の I 先生がテラコヤキッズを見つけて申し込んだ事で利用を始めました。大山さんは父子家庭でお父様はペルー人、日本語はほとんど話せませんでした。また本人は、軽度の知的障害と判定されていましたが、コミュニケーションの問題はなく、学習面と自己発信の弱さに課題がありました。本人・お父様共に就職が希望だったので、テラコヤキッズの活動の中で、課題に取り組むことになりました。

【テラコヤキッズの活動 3 本柱】

●その一、調理

『調理の目的は料理が上手になることにあらず、自己肯定感を育てることにあり！』

調理は「買い物」から「切る」「混ぜる」「焼く」そして「食べる」まで、様々な工程があり、子どもたちが参加しやすい活動です。テラコヤの調理の特徴は『調理実習形式』ではなく『お手伝い方式』を取っており、私たちスタッフは、子どもたちの自己肯定感が育つために、少しでもお手伝いしてくれたら「ありがとう」と必ずお礼を伝えるように意識しながら支援しています。

●その二、外出

『外出の目的は目的地で遊ぶことにあらず、社会の目に触れることにあり！』

川崎の子どもたちの移動手段が、スクールバスや送迎車、自家用車等が多く、公共交通機関を利用する機会が少ないと感じます。私たちは、外出の真の目的を「その場で楽しい」事以上に「社会の目に触れること」だと考えます。子どもたちは「電車やバスでは騒がない」「お金を払って切符を買う」「集団と一緒にいて来る」など、外出の中で社会から色々な事を学びます。そして、

私たちは「社会性は社会の中でこそ身に付けられる」と考えています。

●その三、リクエスト

『リクエストの目的は自己発信とあきらめる力をつけることにあり！』

特に自閉症の方には見通しが大切と言われますが、あえて予定の決まっていない活動として「リクエスト活動」を取り入れています。子どもたちは「はじまりの会」の中で自分の行きたい場所、やりたいこと、食べたい物などを提案し、話し合いや投票でその日の活動を決めます。当教室は発語が困難な子どもが多いのですが、言葉でのコミュニケーションが難しい場合も、今まで行った活動はカードにしてあるので、そのカードで自己発信をすることができます。リクエストで大事なことは、やりたいことを「自己発信」する、決まったらことは実現する、自分の思い通りにならなくても「まあいいか」「また今度にしよう」とあきらめる力がつくことにあります。

3 考察

大山さんは当教室の最上級生として小・中学生の子どもたちからお兄さんの存在として慕われ尊敬と憧れの的でした。そして大山さんは自己発信・自己主張・自己選択の力を身に付け、横浜市の就職支援センターを通して物流企業に就職が決まり、2016年3月に卒業をしました。

それから約1年半後の2017年7月、大山さん本人と元担任のI先生から電話があり、「就職した会社は重労働、長時間残業でとても辛くて辞めたいが辞めさせてもらえない。辞めたい気持ちもうまく伝えられない。どうしたらよいか」という相談を受けました。

私たちは本社のD&I社長、杉本に相談をし、社長とI先生、大山さんと3人で面談を行いました。すぐに就職先は探さず、転職活動に向け何が必要かを話し合った結果、週3回、テラコヤでボランティアをしながら失った自信を取り戻した後で、面接の練習や企業実習を重ね、慌てず、本人に合った職場を本社のエージェントと一緒に探していくことにしました。

その後の転職活動は順調に進み、2社から内定が出ました。A社は、アルバイトで給与は高くないものの、働きやすい雰囲気業務も比較的簡単。B社は、給与は高いが、残業が多少発生する場合もあり、業務の難易度は高い。その2社から、おそらく大変だと思われるB社を、彼は自らの意思で選択し、決断をしました。その時、彼は「選べると思わなかった」と言いました。

彼はこれまで、人生の選択を自分でしたことがなかったのです。学生時代、支援級に入ったのも、定時制の高校に入ったのも、最初の就職先も、彼が自分で選択したのではなく、周りの大人が決めたものでした。彼はこの時初めて自分で自分の人生を選択しました。

4 おわりに

大山さんの障がいは軽度で、今回のケースがすべての障がい者に当てはまるとは思いません。しかし障がいの程度や種類に関係なく、誰もが自分の生活や人生を自分で選択して生きることができる社会であるべきです。そして当事者自身が

成功や失敗の体験の中で、自分の力で選択できる人間になる事が、自分を変え、社会を変える。
私たちはそう信じています。



「選べると思わなかった」と人生の選択をした瞬間の大山さん(右)と杉本社長(左)